# 私の仕事は船大工

名人　那須　清一（75）　美濃市
聞き手　佐藤　広大　郡上高等学校三年

森を守り、育て、そして恵みを生かして持続的に循環させていくことの重要性について、国民に広く理解していただくため、平成14年度から「もりのくに・にっぽん運動」が展開されています。

その運動のリーディングプロジェクトとして、「森の名手・名人」制度が誕生しました。「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。

この「森の名手・名人」を「森の"聞き書き甲子園"」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。

今月号から不定期となりますが、岐阜県内の「森の名手・名人」をご紹介します。なお、年齢・学年は取材当時のものです。

## 私の子供時代

昔から家の周りは山と川。家の近くに川があるので夏場5月から10月までは川の漁をやる人が大勢いた。

その頃はとにかく食べ物が無い時代だったので、食っていくために百姓をやったり、休日は時間があれば家の手伝いをした。日曜は山へ行ったり、夏場は鮎漁を昼間も夜もずっとやった。翌日は眠いけれど何とか起きて学校へ行った。そうゆう状態だったので、学校の成績は上がったという経験はねえ。

## 親父

親父は14歳の時から関市に船大工の弟子として住み込みで、28歳になって家に帰り、船大工仕事を始めた。修業先が関市だったので、鵜飼船を専門に作っていた。作った船によって船頭が一生懸命船を漕いでも、速い船と遅い船ができる。だから、なるべく軽い、速い、使いやすい船を作れということで結構しごかれたらしい。板の厚みをギリギリまで薄く削って、軽い使いやすい船を作って「あそこの船は軽くて丈夫で使いやすい。」と言われるまで努力したと言っていた。その代わり、船としては板が薄い分、耐久性は弱くなって寿命的に弱い分がある。

## 完璧なんてない

出来上がった船に完全も最高もないと思う。結局、仕事をしていて、いつも絶えず不安と二人連れみたいな分がある。船が出来上がっても完璧な満足とゆうことはない。でも、それなりに良くできたとゆうことは、ちょくちょくある。

教科書どおりに作業をするのではなく、勘とか慣れでやる部分が多い。良い材料を使って、一生懸命やれば、製品がいいのはわかるけれど、二級品に近い材料を使って、製品は一級品に近い船を仕上げるというのが一つのこだわりでもある。板の使い方、材料の使い方が結果に出てくる分が多い。一本の木から板をなるべく無駄にせんように精一杯に使い、木を調べて予定を立て想定に近い形に出来上がると、よかったなあ、という満足感が出てくる。

出来がいい時は、準備とか船を見る目とか、出来んかった時よりも違うし、出来たって感じもする。仕上げてみて、なんとかさまになったなあ という気持ちは満足感より安堵感の方かもしれん。予想以上によく仕上がったという満足感が味わえる。

## 船の材料

コウヤマキの木は水に強いもんで、この辺の木曽三川の船の材料は95%ぐらいはコウヤマキやね。あと、ヒノキを若干使うときもある。でも、コウヤマキは杉とかヒノキみたいな木のように市にしょちゅう出てこんもんで、あらかじめ業者に頼んどいて、コウヤマキが入ったら連絡をもらうようにしておる。

船を作るのにはまず、船の材料を木材市場で買い集める。それから製材で挽いて板にする。自然の木を材料に使う関係で材料の乾燥が一番基本になる。今日、山から切り出して製材かけて板にして、それで作るわけにはいかんね。最低、外では、2年は雨さらしにして乾燥させて、それから中へ入れる。なるべく乾燥に、完全な乾燥の状態で加工するってのが一つの基本。

材料の仕入れは市へ材料が出る時期にするしか、仕方がないね。材料がほしいでって、市場を走り回って探してもないとなると、ほとんどほしい木がない時があるもんで、この先にどうゆう船を作るとゆう予測を立てて材料を仕入れて準備しておく。

森の"聞き書き甲子園"フォーラムに参加した那須清一さん（左）と佐藤広大さん（右）





## 仕事

船をつくるのには、大体船の大きさの指定しかないわね。船を使う本当の川をはっきり見ずに作ることがほとんどやね。

材料を一艘分の作る船の大きさ、長さ、幅に合わせた材料を乾かし終わって準備の出来た板の中から選りだして、作業小屋へ持ってくる。下準備が終わった材料を使って船を作る。

船を作る期間としては、屋形船を屋根まで作ると、2ヶ月ぐらいかかる。小さい船やと、1週間から10日で作れる。

仕事では気持ち的な部分が大きい。こんな船はどうでもいいで格好だけ作って早いとこ渡して金貰えってゆう気にはなれんね。どの船にしても仕上がりが完璧ではないにしても、自分なりに誠心誠意、一生懸命取り組んで船を作ったとゆうことを何時でも言える状態でやることにしておる。

川で漁をやる船に乗る人の身長とか体重の差で浮かんどる船に人が乗った時のバランスが違う。川の流れの速さや乗る人、あとは川でやる仕事とかを考えて船を作る。川にも流れの具合とか川幅とか、いろいろあるもんで、なるべく船を使う人のやりやすいように使う人の立場になって、一番使い易い形の船を作りたいってゆうのがつくる時の始めから終いまでの基本的な姿勢や。

森の"聞き書き甲子園"フォーラム

## 水が入らんようになる

船は一枚で出来ておらんもんで板を合わせる場所は全部木殺しをする。木殺しは板を合わせる所を叩いてへこませる。合わせる両方の板を木殺ししとくと、水が浸かった時に木殺ししてへこました所が100%は戻らんけども、70%ぐらいは水で膨張して水が入ってこんようになる。木殺しした所が膨らむ力で水が入らんようになっておる。木殺しは1cmぐらいの幅で叩いて木殺ししてく。普通は板の両端をそれぞれ2回ずつ、真ん中を2回ずつ木殺しして、大体6回くらい叩くんやね。木殺しした所は水平よりちょっと窪んだ形になる。それが木殺し。木殺しは船に水が入らんようにする作業で一番仕事としては大事なことや。

## 欠かせない仕事

船作りの時期は秋から冬、春がまあまあ良い時期。5月頃から入梅の時期になると、湿度が高こうなるもんで木自体も目には見えんけど結構膨らんでおる。入梅の時期に作った船は乾燥期になるとキッチリくっ着いておったはずの板が隙間が見えてくるもんで、入梅の時や湿度が高くて雨の降るような時は板を合わせる仕事はなるべくやらん。なるべく乾燥した時期に乾燥した材で船を作るとゆうのが基本。

那須さんと進水前の屋形船

板の厚さを基本に釘を打つんや。板が厚くなると釘も当然、太くて長い釘を打つ。でも、適当に釘を打ち込むと板が割れてまうもんで先にモジってゆう道具で穴を開けてから釘を打つ。釘を打つ所に節がある辺は特に割れ易い。そんで、割れ易い所はなるべく避けて釘を打つ。釘打ちは釘を打つ手応えと音を聞きながら釘がどの程度、利いてくかを加減しながら勘で打つ。

始めに釘を打っておるうちは、釘を叩く音が柔らかいけども、最後に釘が行き止まりですって段階まで叩くと釘の頭にカチンとくる音がする。

釘が打ってあっても水に浸かると、水が入ってくる時もある。船の寿命で15年、20年は水が入ってこんように釘に力を持たせる釘の打ち方をしておる。それが釘を打つ仕事の中でも大事な分やね。

## 伝統は今

伝統が途切れることは悲しいってゆうか、情けない分もある。自分の努力不足的な分もないとも言い切れんと思う。

やっぱり、地道にコツコツと積み上げて覚えてやるとゆう手仕事の類は今の時代にはあんまり合わんと思うし、職人の世界ではどこでも共通したとこやないかと思う。例えば、現実に船がどんどん注文があってたくさん需要があるとなりゃあ、船大工も増える可能性あるやろうね。けども仕事の量にムラが結構あるもんで、それも含めて今の若い世代の人に向く分は少ないと思うし、なんとか定まった収入があるってゆう保障がありゃいいけど、それの分はかなり厳しいで。本人がやってよかったって思いにつながりゃあ良いと思うね。

伝統とか職人の技術を受け継ぐ人は船でも他の物品にしても、モノを作ることに楽しみや、気持ち、技術が伴った人がやって生活の手段が他にも得られりゃ、なんとか続くかもしれん。でも、いくら歯を食いしばって頑張ってやるぞって言っても、お客さんがなかったら仕事は成り立たん。

職業として船大工が成り立つか成り立ったんかって事になると、かなり厳しい部分があるもんで、若い人にこれから船大工やらんかってゆう薦め方はできん。

【㈳岐阜県緑化推進委員会　倉　武】